

# 飲酒運転事故で娘の命を奪われた母の思い

無職 女性 50代

あの18年前の朝、あなたは生まれました。

春三月のいぶきを感じるうれしい朝に、とても元気な声で生まれました。

うれしかった。天にもものぼるくらい最高にうれしかったです。

小さめでとても元気のいいあなたでした。初めてあなたを抱いた喜びとあの感触をまだ覚えています。口いっぱいお乳をふくんだあのほほのふくらみ、今もはつきりと思い出されます。私の顔を見て、とても嬉しそうに笑っていました。大きな瞳は私を写してくれました。それが時々小さな鏡のようにも思えました。お母さんはうれしかったです。生まれた時からずっとあなたの

成長がともうれしかった。

それが、元旦のめでたき日に、さよならも言えず、いともたやすく永遠の旅へと出かけてしまいました。あの笑顔もない、返事もないあなたを抱いた時、もうこの世には神も何もないと、くやくしてたくさん泣きました。知らずして悲しい遊びに連れ去られたことを、あなた自身も悔やんでいるのだと思っても、お母さんは何をすればよいのかわからず、ただ毎日泣き続けるばかりでした。一目会いたくて、あの声がもう一度聞きたくて、毎日泣きました。そして、あなたに届いて欲しいと手紙を出し続けました。

私は飲酒運転の事故で我が子

の命を奪われる最悪な現実をみました。事故は何の前触れもなく、また瞬時に起きる恐ろしいものです。あの頃の苦しみは、

当初よりは時が経った分、少しは軽くなつたものの、亡くした命の修復は永遠にできないものだと思ひ知らされ、さらに悲しく、くやく、やりきれないのです。何かの折に、今いたら、あの子はいくつで…とすぐ年を数えてしまいます。現実にはない我が子のことを思うと悔しくて…私のその気持ちは、いつまでも心の中にあり、ずっと消えることはないでしょう。

生身の人間である私達は、いつでも「生と死」と隣り合わせにして生きています。私達はこの世に「生」を受けた日から生きることに歩き始めます。しかし本来ならずと生きたであろう命が事件や事故により、死を招くことがあります。どんな死にせよ残された家族にとっては死は辛いものです。命の消える

悲しみは同じだというのに、なぜか慰めてくれる言葉では「あれは交通事故だったのだ」という風に使われたりします。不慮の事故によって命を奪われることは誰にでも起きる。どうしようもないことだ。という意味からでしょうが、しかし事故であろうと何だろうと私達にとつて、娘の命はかけがえのないもので、あきらめることができないのです。あの事故以来、なにかと敏感になつてしまいました。

娘の死後も交通事故死事故は後を絶ちません。交通事故死事故の記事をみるたびに胸が痛みます。残されたご遺族のことを思うと胸が張り裂けそうな思いです。みなさん私達のような辛い遺族を二度と出さないで下さい。この沖繩から飲酒運転がなくなることを切に願っています。